

1 私を育てたあの時代、あの出会い

生徒と向き合うその姿勢に
生徒指導の原点を感じた

宮城県仙台市立五橋中学校校長◎高橋 泰

特集

3 「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第3回

学び合い

—クラス全員が学びに参加する授業—

4 課題整理

学び合いの現状と授業に取り入れる際の工夫

6 インタビュー

全員での課題達成を目標に
自立した学習集団をつくる

上越教育大大学院学校教育研究科教授◎西川 純



10 学校事例1

模範授業や「学び合い通信」で
目指す授業像を共有し、校内研で深める

愛知県小牧市立北里中学校



16 学校事例2

教師は生徒をつなぐ役目に徹し
自らかかわり、学ぶ力を育む

長野県松川町立松川中学校



21 学校事例3

授業力向上の「共通語」として
学び合いを少しずつ導入

佐賀県佐賀市立東与賀中学校



26 資料

学力層別に見る
生徒の学習動機・理解度と授業方法の関係

28 特別企画 デジタル教材最前線 [前編]

ゲーム要素を活用した学習ソフト
今後の可能性と課題とは？

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。 VIEW21編集部一同

<http://benesse.jp/berd/> 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。

また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

生徒と向き合うその姿勢に 生徒指導の原点を感じた

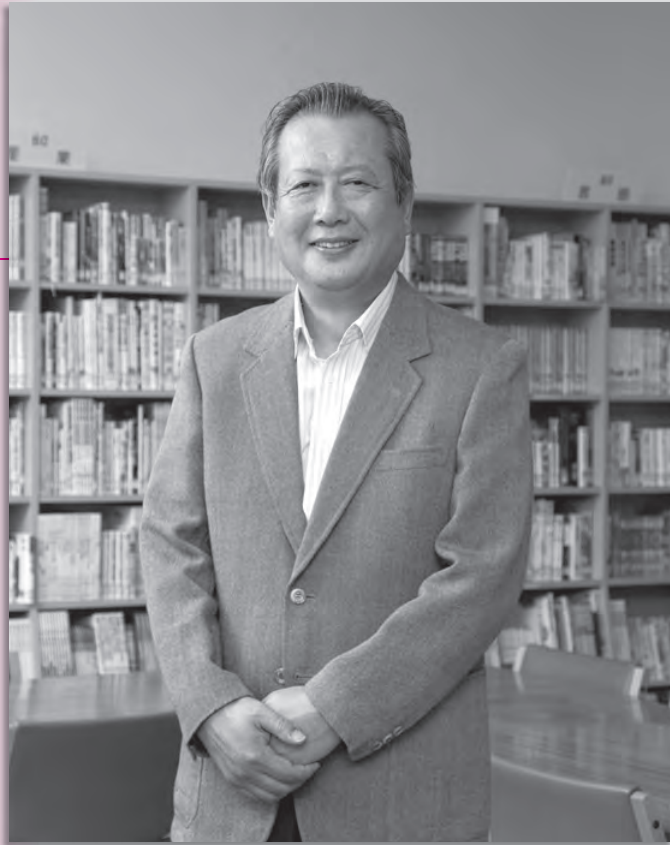
宮城県 仙台市立五橋中学校校長 高橋 泰 TAKAHASHI YASUSHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、高橋校長が語る。

「見付かるまで頑張りましょう」
若手教師の姿に心打たれた

20〜30代に赴任した学校は生徒指導上の課題を抱えていることが多く、大柄で腕力のある私は3年生の担任をよく受け持っていました。まだ若く、経験に乏しかったこともあり、暴力を振るうような生徒に力に対応することもしばしばありました。ある時、素行を注意した男子生徒にネクタイをつかまれました。私は落ち着いた口調で「やるんだったらやってもいいぞ」と言いました。すると、その様子を見ていた生徒たち

が男子生徒を必死に制してくれたのです。友だちの言葉を受け入れ、男子生徒は手を離しました。この一件で、私は生徒としっかり向き合い、力でなく言葉で思いを伝えれば、荒れは収まるはずだと思いました。早速、教職員、生徒・保護者それぞれを対象とした生徒指導通信を発行しました。校内の様子を包み隠さず伝え、生徒と接する時にお願したいことなどをつづっていったのです。生徒指導に懸命に取り組み、その後、教育委員会に異動。教頭として再び現場に戻りました。地域でも有名な荒れた学校でしたが、管理職と



たかはし・やすし 専門教科は国語科。宮城県公立中学校教諭、教頭、校長、仙台市教育委員会（教頭・校長職の前後に指導課指導主事、教育相談課主任指導主事、教職員課課長）を経て、2009年度、仙台市立五橋中学校に赴任。

1975 (昭和50)

新採で名取郡秋保町立（現仙台市立）秋保中学校に赴任

1986 (昭和61)

仙台市立西山中学校の新設と同時に赴任

1992 (平成4)

仙台市教育委員会指導課義務教育班に異動

1997 (平成9)

栗原郡築館町立（現栗原市立）築館中学校に教頭として赴任。菅原先生と出会う。学校だより『大杉』を発行

2002 (平成14)

仙台市立富沢中学校に校長として赴任。学校だより『かしわ』『扉を開く』を発行

2006 (平成18)

仙台市立宮城野中学校に赴任。校長通信『人生意気に感ず』を発行

2009 (平成21)

仙台市立五橋中学校に赴任。校長通信『つぶやき』を発行。仙台駅に近い同校は東日本大震災時に避難所となり、地域住民や帰宅困難者らを受け入れた

なった私は、昔のように生徒と向き合えないこともありました。そうした時、率先して動いてくれたのが当時30代後半の菅原通英先生でした。

菅原先生は、誰よりも生徒思いの先生でした。冬のある日、受験を直前に控えた3年生の生徒が進路のことで保護者とけんかし、家出をしました。警察に届け出て、雪の降る中、学校でも教師総出で探しました。こうした時、夜10〜11時くらいまで探して見付からなければ、あとは警察に任せるのですが、菅原先生はみんなに「頑張りましたよ」と声を掛け、決して諦めようとはしませんでした。その言葉に勇気付けられ、皆で明け方まで探し続けた結果、その生徒を隣町で保護することが出来ました。皆で安堵すると共に「決して生徒を見放さない」という菅原先生の強い意志に心を打たれました。

宴席には必ず出席し、ウーロン茶で談笑していました。人とかかわりが好きなのだと思えます。先生の周りには生徒も教師も自然と集まり、相談もよく受けていたようです。

私も若手時代、生徒指導に懸命に取り組みましたが、どちらかと言えば単独プレーが多かったものです。そうではなく、教師が一丸となって問題に当たること、より強い力が生み出せることを菅原先生から学びました。生徒指導に悩む先生には、「菅原先生を手本にしなさい」とよく言ったものです。

復興のために立ち上がった生徒たちを支えていきたい

私が菅原先生の情熱に動かされたように、物事は、理詰めや利害に関係なく、それに取り組む人の心意気に打たれて動くこともたくさんあります。私は毎朝校門に立ち、登校してくる生徒たちにあいさつをしますが、部活動や委員会単位で、あるいは個人で自主的に参加してくれる生徒たちがいます。教室の中で教えるだけでなく、教師が一生懸命取り組む姿を見せることも大事なことだと思っております。

教師が懸命に取り組む姿を見せることも大事な教育



先の東日本大震災で、本校は避難所となりました。仙台駅から近いため、地域住民だけでなく、帰宅困難者や旅行者からも受け入れられました。保健室では、近隣の病院からあふれてきた軽傷患者の治療に当たりました。教師たちは力を合わせ、その全ての対応に当たり、約20日間、避難所としての役割を果たしました。

そして今、生徒たちは「市内の中心地にある本校から明るさを取り戻そう」をスローガンに震災復興プロジェクトに取り組んでいます。合唱大会では3年生のクラスが「親知らず子知らず」を自由曲に選び、追悼と復興の祈りを込めて歌い上げました。9月の文化祭では、3年生だけでも100人余りが実行委員に立候補し、数々の催しを成功させました。その心意気に、私たち教師の方が頭が下がる思いです。生徒を頼もしく思うと同時に、彼らが生き生きと活躍できるよう、我々教師は一丸となって支えていきたいと思っております。

「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第3回

学び合い

— クラス全員が学びに参加する授業 —

クラス全員が学びに参加する授業形態の一つとして、
学び合いが注目されている。

しかし、なぜ学び合いが有効なのか、
全ての生徒が主体的に学びに向かうようになるのか、
疑問を感じている先生も少なくない。

本特集では、インタビューと学校事例を通して、
学び合いによる生徒の変化とその実践の工夫を考える。



学び合いの現状と 授業に取り入れる際の工夫

小誌の読者モニターアンケートやヒアリングからは、
学び合いに関してさまざまな疑問や不安を感じている先生が多いことが明らかになった。
今回紹介する3校では、同様の課題を少しずつ改善した結果、生徒や教師に変化が見られつつある。

学び合いに関する疑問・不安

関心はあるが……

学び合いで本当に学力が付くのか分からない

特定の学力層の生徒しか伸ばせないのではないか

荒れている学校や落ち着きのない学校でも成立するのか

孤立する生徒はいないのか

取り入れてみたいが……

まず何から始めれば良いのか分からない

学び合いの具体的な方法が分からない

既に取り組んでいるが……

今の学び合いで良いのか、学び合いになっていないのではないかと不安

保護者から理解を得にくい

導入に消極的な教師が多く、学校全体の取り組みに発展しない

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

学び合いで大切なこと

- 自立した学習集団を目指して、目標を語り続ける
- 教師が教え込むのではなく、教師が提示した課題に対して生徒が自由にグループをつくり、学び合う

上越教育大 西川純教授
▶ P. 6

学校事例に見る子どもたちの変化

- 生徒が学びを楽しむようになる
- 課題を終えても『分かったつもり』のままにせず、納得するまで求め続けるようになる

小牧市立北里中学校
▶ P. 10

- 仲よしグループを超えて、課題解決のためにグループを横断的に動き、新たな人間関係が生まれる
- 複数の『分からない』が学力上位層の理解を揺るがし、更なる学習行動へと動かす

松川町立松川中学校
▶ P. 16

- ノートすら取らなかった生徒が途中まで解答を考え、どこまで分かり、どこが分からないかを友だちに説明できるようになる

佐賀市立東与賀中学校
▶ P. 21

学校事例にみる実践の工夫

- 机の並べ方やグループ分けなどの「型」ではなく、学び合いの考え方を取り入れてみる

小牧市立北里中学校
▶ P. 10

- できる教科・単元から取り組む

松川町立松川中学校
▶ P. 16

- 3年間の視点で考え、1年目は学び合いのスキル指導に重点を置く

佐賀市立東与賀中学校
▶ P. 21

- 模擬授業や「学び合い通信」の発行で目指す授業像を共有する

小牧市立北里中学校
▶ P. 10

- 成績だけでなく、人間関係や学習意欲、自己肯定感を丁寧に育てる

松川町立松川中学校
▶ P. 16

- 成果を焦らず、生徒を信じて続ける
- 授業公開や「学び合い通信」の発行で保護者の理解を得る

佐賀市立東与賀中学校
▶ P. 21

全員での課題達成を目標に 自立した学習集団をつくる

上越教育大大学院学校教育研究科教授 西川純

学び合いについて「何となく大切だと思っっている」「関心がある」——そうした声は多くの先生方から聞かれる。そもそも、学び合いとはどのような教育活動なのか、実践の上で何が大切なのか。学び合いの研究を進める上越教育大大学院の西川純教授に話を聞いた。

日々の授業でこそ 人とかがわる力を育む

中学校教育に求められるのは、社会で生きていくために必要な力の育成です。社会ではさまざまな人が互いにかかりながら生きていくため、日常生活でも仕事でも、自分一人では解決できない問題がたくさんあります。

そうした社会で自立して生きていくためには、自分とは異なる価値観や考え方を持つ人とつながって協力的な関係を築く力、つまり他者と折り合いをつけながら課題を解決する力が欠かせません。教育基本法が第一条で教

育の目的を「人格の完成」と位置付けているのは、このことを指すと考えられます。

こうした力はこれまで、特別活動や部活動で身に付けるものと捉えられがちでした。しかし、生徒が学校で過ごす時間の大半を占める授業の時間にこそ、他者とかがわり、知識を活用して課題を解決する活動をもっと取り入れるべきではないでしょうか。私は、学び合いがその活動に適すると考えています。

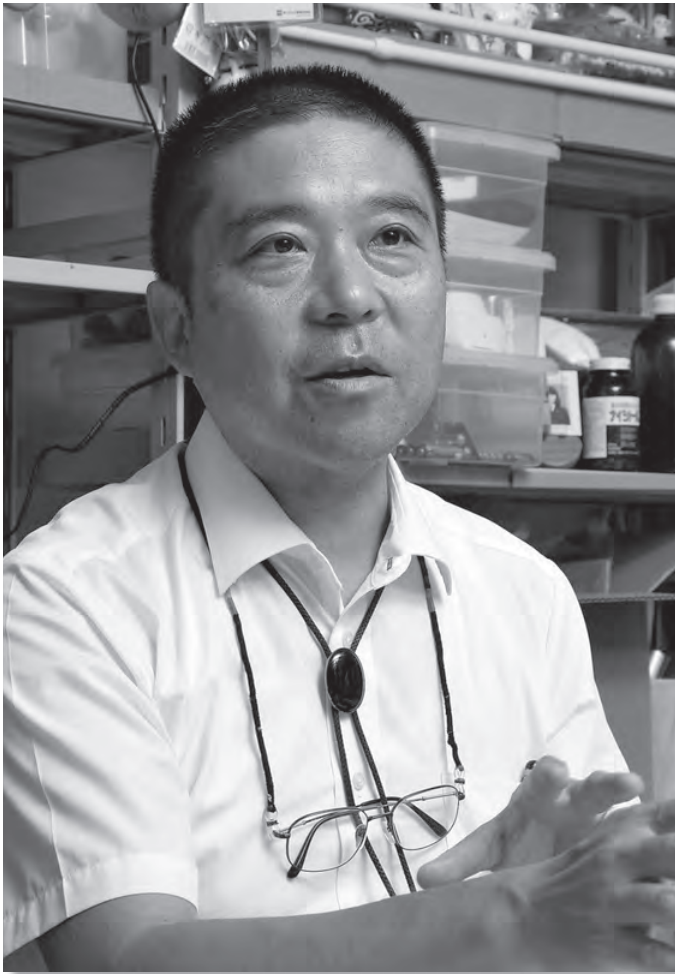
教科学力の差にかかわらず 自ら学びに向かうようになる

学び合いは、教師が教科の内容を説明し、

生徒がそれを聞く授業スタイルの対極に位置します。教師が教え込むのではなく、教師が提示した課題に対して生徒が自由にグループをつくり、互いに学び合うのです。分らないところも、生徒同士が相談して解決します。

学力下位層の生徒は、必ずしも教科内容に関心がないわけではありません。基本的な用語や言葉の意味の理解が不十分であるため、授業に参加したくても出来ないことが多いのです。学び合いでは、友だちと話し合っていく中で、ちょっとした疑問を気兼ねなく質問できます。更に、一人の友だちの説明で分かなければ、別の友だちに尋ねるといよう

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—



にしかわ・じゅん◎筑波大学院教育研究科教科教育専攻修士課程修了。博士(学校教育学)。物理科教師として東京都立高校に勤務後、上越教育大で研究者の道に進む。2002年より現職。「学び合い」を広げるため、講演や執筆活動を行っている。著書に「『学び合い』スタートブック」(学陽書房)など多数。
※なお本文では、学び合いで表現を統一しています

に、何通りもの説明を聞けるのです。説明の仕方は生徒によってさまざまですから、どの生徒も、自分にとって分かりやすい説明を見付けられるでしょう。

少しでも理解できれば、これまで出来なかった生徒は学ぶ楽しさを実感します。最初は正解だけを教えてもらい、しかもその意味が分からず放っておいた生徒が、学習意欲が高まるにつれて、「自分が分からないのはどこか」「どう分からないのか」を説明した上で解き方を尋ねるようになります。

そうした質問の数は次第に増えていき、無意識のうちに教科の本質を捉えた質問が現れ

ることがあります。例えば数学の正負の数で、「移項すると、なぜプラスだった数がマイナスになるのか」といった質問が出ると、上位層の生徒でも、言葉に詰まってしまいます。

移項とはどういうことを理解していなければ、答えられないからです。単に解き方を覚えていた生徒にとっては、全く予想しない質問でしょう。生徒自身の知的好奇心や、質問してきた友だちへの疑問に答えたいこの思いから、既習の知識を組み合わせて真剣に考えたり、家で調べてくる生徒も出てきます。

このように理解度が異なる生徒同士が交流することで、全ての生徒の知的好奇心や探究

心が刺激されるのです。

**目標の工夫で
学習意欲は更に高まる**

生徒が主体となり、生徒同士が学習意欲を高め合う授業を行うために、教師は何をすれば良いでしょうか。

まず重要なのは、授業冒頭に示す「本時の目標」です。ポイントは次のようにまとめられます(P.8図)。

■具体的に分かりやすく設定

例えば数学の授業なら、「三角形の合同条件を説明できる」とするのではなく、「合同条件をいくつ説明するのか」を示しましょう。そうすれば、生徒はその問いで何を求められているのかを理解できます。

「いくつ」が示されないと、一つ説明できれば良いと考える生徒も、三つ以上説明できなければいけないと考える生徒もいるというように、各自が達成の難易度の異なる目標に向かって取り組むことになってしまいます。これでは生徒同士の会話が噛み合いませんし、学習意欲も上がりにくいと思います。

■教科によって目標を工夫

例えば理科は、「…について観察・実験の結果を使って、なぜろうそくの炎が燃え続けるのかを説明できる」と、具体的な目標を立てやすい教科です。おのずと生徒の答えも明確になることが期待されます。そこで、答え

図 西川先生が指摘する、目標設定のポイント

- 教師だけでなく、子どもが評価できる表現になっているか（「分かる」「知る」「感じる」などの言葉は避ける）
- 具体的なゴールになっているか（三角形の合同条件を一つ見付ければ達成なのか、二つ以上見付けて達成なのか）
- インプットしたものをアウトプット（表現）させるものになっているか
- 相手（聞き手）を意識させる（言いつ放しにさせない）ようになっているか
- 削って削ってシャープになっているか

だけでなく、答えを導く過程を説明できるところまでを目標にするの良いでしょう。

国語のように、文章の解釈によって複数の答えが成り立つ教科では、「…についてなぜそのように考えるようになったのか、理由とともに他の人にもよく分かるように自分の考えを説明できる」といった目標設定が有効です。単に「自分はこう思う」と言うのではなく、他者に対して説得力のある説明が求められるわけですから、生徒はそれだけ文章を注意深く読むようになるでしょう。

■全員での達成を目指す

全ての目標に「全員で課題が出来るようになること」を掲げましょう。あえて自分一人

の力だけでは達成できない目標を示すことで、生徒の交流を促すのです。

自立した学習集団を目指して 目標を語り続ける

「全員での達成」を目標とすることで、教師も「生徒を一人も見捨てない」と強く意識するようになります。その思いは、常に生徒に伝えていただきたいと思います。「一人でも課題が解けない生徒がいる以上、目標を達成したことにはならない」とクラス全体に語り続けるのです。

もちろん、教師の言葉で生徒全員が動くわけではありません。「自分だけが解ければいい」と思っていたり、「課題なんて解けなくてもいい」と諦めたりしている生徒もいるでしょう。しかし中には、教師の言葉に共感し、学び合いを進める生徒もいます。先生方には、一人でも多くの生徒の心に訴えられるような言葉を磨いていただきたいと思います。

すぐに全員を変えようと考えがちですが、教師が特定の生徒に介入してしまつては、生徒の「自ら他者とかかわる力」を伸ばせません。全ての生徒を信じて待つことが大切です。少しずつ、目標に向かって生徒の気持ちがある、互いに力を合わせる集団となっていく

ます。
学び合いが目指すのは、教科指導を通して自立した学習集団、いわば健全な学級をつく

西川先生が重視する学び合いのポイント

学び合いに最も重要なものは、生徒を信じる教師の気持ちです。そして学び合いは、「大多数の生徒が出来るようになること」ではなく、「全ての生徒が出来るようになること」を目指しています。

実現には、我慢や根気が必要でしょう。しかし諦めずに、その目標がいかに尊いかを生徒に語り続けなければなりません。教師は、生徒の将来を預かっているのです。「目の前の生徒たちを一人も見捨てず、全員を幸福にする」。そうした信念を持って指導に当たることが大切だと思います。

ることなのです。生徒が一つにまとまれば、怖いものではありません。学力向上でも生活習慣改善でも、生徒同士が協力し、自力で実現するようになります。

生徒一人ひとりも、異なる価値観や考えを柔軟に受け入れて、自分の意見を鍛え、さまざまな人と交流する力を身に付けます。そして、その交流を通して互いの結び付きが強まり、集団としていかに大きな力が生まれるかを身をもって感じると思います。まさに「生きる力」の育成と言えるでしょう。

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

西川先生の学び合い実践

Q & A

Q 学び合いでは、教師が生徒一人ひとりの学習を丁寧に見取ることが出来ないと思います。生徒が本当に教科内容を理解できているのでしょうか。

A 私は、50分の授業時間内に一人の教師がクラスの生徒一人ひとりの学習を見取ること自体が難しいと考えています。理解度は、生徒の数だけ異なるからです。学び合いで教師が見取るのは、生徒一人ひとりではありません。「全員での課題達成」を目標とし、生徒がどのような話し合いをしているか、「集団の様子」を見取ります。

集団が学習内容をしっかり理解しているかを見取る指標は、授業の最後に行う確認テストや定期考査の最低点です。成績中・上位層の生徒の得点が大きく影響する平均点と違い、最低点は、成績下位層の生徒が学習内容を理解しなければ上がりません。だからこそ、理解不十分な生徒が一人も出ないよう「全員での課題達成」を目標とします。

Q 教師が介入しないで、生徒は本当に学習しますか。友だちの解答を写す生徒もいるのではないのでしょうか。

A 学び合いを始めて間もない段階では、確かに解答を写す生徒がいるでしょう。分らないことが恥ずかしいからです。

しかし私がかかわってきた学校では、学び合いが進み、学習意欲が高まる生徒が増えるにつれて、授業内容を十分に理解できない生徒の存在を、他人事としない雰囲気生まれてきました。生徒は誰でも、勉強が出来るようになりたいと思っています。解答を写しても自分の学力にならないことは、その生徒自身がよく知っています。

教師が「解答を写すな」と言うのは簡単ですが、生徒は教師に隠して写すようになるだけで、本質的には解決しません。全員で学びに向かおうとする集団が出来てくると、誰もが解答を写そうと思わなくなるでしょう。

Q 自由に交流させると、孤立する生徒が出てくると思います。それでも良いのでしょうか。

A 学び合いだから生徒が孤立したのではなく、孤立が顕在化したに過ぎませぬ。その生徒は、学び合いを始める前からそういう状況に置かれていたのです。

生徒の孤立を目的にしたりする先生方のつらい気持ちは、よく分かります。しかし、教師が生徒に個別に指導し過ぎると、他の生徒は「先生が担当するんだ」と思います。そして、その生徒は他の生徒とますますつながれなくなってしまう。教師はいつまでも生

徒に手を差し伸べられません。将来を思えばこそ、生徒が自分の力で解決できるように指導すべきではないでしょうか。

大切なのは、この問題をクラス全体の問題として捉えることです。孤立している生徒に原因を求めるのではなく、「全員が分かる」「全員が授業に参加する」という目標を達成していないクラス全体に対して、「それでいいの」と強く語り続ける必要があります。

もちろん、孤立しかねない生徒がいる場合は、学び合いを始める前に、その生徒の保護者と話す機会を設けるなど、理解を得る努力をした方が良いと思います。先生ご自身がどういうねらいを持って学び合いに取り組んでいるかが問われる場面です。

Q 生徒中心の授業スタイルに対して、保護者は不安になると思います。不安を解消するにはどうしたら良いでしょうか。

A 学校に関して、保護者の最大の情報源は生徒です。生徒が学び合いに面白さを感じれば家庭で話す感想も充実し、保護者の不安はおのずと減ると思います。そのためには、授業参観などの機会に実際の学び合いの様子を見てもらうことも重要です。

学び合いが進んで学力が底上げされることも保護者の理解につながりますが、これはあくまでも結果です。まずは、生徒にとって充実した取り組みになるよう努めることが大切だと思います。

模範授業や「学び合い通信」で 目指す授業像を共有し、校内研で深める

愛知県 小牧市立北里中学校

子どもの主体性を育てるために学び合いを導入した小牧市立北里中学校。当初は取り組みがスムーズに進まなかったが、全校で目指す授業像の共有と実践を進めてきたことで、学び合いのある授業が浸透してきた。

生徒の現状と 学び合いで特に付けたい力

- 純朴で素直に指示に従うが、主体性に欠ける
- 他者を認め、他者とかかわり合いながら自己を高めていこうとする意欲が弱い
- ➔ 他者を認め、他者と高め合いながら、自らの考えで判断し、行動できる自主性

学び合い導入の経緯

- 5年前に全校で取り入れたが、浸透しなかった
- 模範授業や「学び合い通信」を発行し、教師間の共有が進む
- 2009年度から研究指定を受け、全ての教師が良さを実感し、研究指定終了後も学び合いを深めている

学び合いの概要

- 「学び合い通信」を発行する
- 月1回の校内公開授業を行う
- 公開授業前の事前検討会「授業を語る会」では、教科を超えて学び合いのイメージを共有し、深める

学び合いの工夫

- 学び合いをマニュアル化せず、生徒の反応を見ながら、グループでの学び合いや一斉指導を取り入れるタイミング、時間を考える
- 公開授業前の「授業を語る会」、公開授業後の研究協議（事後検討会）、「学び合い通信」を通じた目指す授業像の構築

School Data

◎ 1947（昭和22）年開校。農村地帯と住宅地が混在する地域にある。2009年度から2年間、小牧市からの指定を受けて、「まなびを楽しむ学校をめざして」をテーマに校内研究を行った。



校長◎ 安藤和憲先生

生徒数◎ 444人 学級数◎ 15学級（うち特別支援学級2）

所在地◎ 〒485-0051 愛知県小牧市下小針中島 2-170

TEL◎ 0568-73-3171

URL◎ <http://www.komaki-aic.ed.jp/kitasato-j/>

公開研究会◎ 2011年11月21日（月）、2012年3月15日（木）

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

学び合いのある授業で
主体性を育てたい

板書はノートにきれいに写すが、丸写しするだけで自分の考えはほとんど書き加えない。宿題にはしっかりと取り組むが、それ以上の学習はあまりしない。安藤和憲校長は、赴任当時、生徒のそのような姿勢に課題を感じたという。

「生徒は純朴で教師の指示に素直に従いますが、もう一歩進んで、自ら考え判断して行動する主体性や、他者を認め、他者とかかわりを持つて自己を高めていこうとする意欲が弱く感じました。友だちと協力して話し合いながら、自分の考えをより深く、より広いものにしていく。そうしたかかわり合いのある授業を通して、自主性を身に付けさせたいという思いで、5年前から全校で授業に学び合いを取り入れていきます」

考えを深めたり、主体性を高めたりするために、なぜ学び合いが有効だと考えるのか。国語科担当で1学年担任の坪井小枝先生は、日々の指導を通して次のように感じていると話す。

「学び合いでは、相手に自分の意見を伝える必要があるため、『考えなければ』という意識が働きます。更に、友だちの考えと比較して、自分の考えを磨くことができます。一斉授業でも考える場面はありますが、生徒に

よつては、受け身の姿勢で聞いているだけで授業が終わってしまうことがあります。一人ひとりの生徒が、自分の頭で考えたことを自分の言葉で目の前の相手に伝える場面のある学び合いは、生徒の主体性を育てるのに有効だと捉えています」

生徒が答えを「つくり上げる」姿を見て、目指す授業像が明確に

しかし、導入当初、取り組みはスムーズに進まなかった。

学び合いを行うには、まず生徒が話し合いやすい環境を整えることが必要だと考え、全ての授業でグループ活動や「コの字型」の机の配置を取り入れた。ところが、従来の指導との違いに戸惑う教師が多く、学び合いは学校全体に浸透しなかった。

「最大の問題は、教師が『よい学び合いとはどのような状態か』という目指す授業像を持つていなかったことでした。グループ活動などの『形』だけを取り入れても、生徒の学びは深まらなかったのです」(安藤校長)

その状況が好転したのは、4年前に永田春季教頭(当時は教務主任)、3年前に教務主任の林文通先生が赴任し、学び合いのある授業を行い、他の教師に見てもらったことがきっかけだった。2人とも前任校で学び合いを授業に取り入れていて、豊富な経験があった。林先生は次のように振り返る。



小牧市立北里中学校校長
安藤和憲 Ando Kazunori
「教師は人を育てられる有難い職業。「人づくりは心づくり」の気持ちで、真っ直ぐな心を持つ生徒を育てたい」



小牧市立北里中学校教頭
永田春季 Nagata Haruki
「情熱を持ち、生徒にとって印象深い教師でありたい。教頭として、言いづらいこともきちんと教師に伝える」



小牧市立北里中学校
林文通 Hayashi Fumiyuki
教務主任。「プロとして授業をすることを楽しめる教師でありたい。生徒には学ぶことの楽しさを伝えたい」



小牧市立北里中学校
坪井小枝 Tsuboi Sae
国語科担当、1学年担任。「生徒が自分で考える余地を残した指導をし、生徒の知恵を借りながら学級をつくる」

「発問の仕方や教材提示の工夫により、生徒に自分の経験や気付きを発言させ、教師がそれらをつなぐことで、生徒に『自分たちで答えを導いた』という実感を持たせる。そのような授業を行い、先生方に学び合いの方法や良さを感じてもらいました」

教師が答えを「教える」のではなく、子どもが答えを「つくり上げていく」。林先生の授業に生徒たちが引き込まれていき、学びを楽しむ姿を見て、他の教師は、学び合いのある授業とはどのようなかを思い描くことができた。こうして、校内に前向きに取り組

もうという空気が生まれていったという。

しかし、目標とする学び合いのある授業のイメージができて、自分の授業で実践するのは容易ではない。林先生は、空き時間に他の教師の授業を見て回り、学び合いの場面で「まなびを訪ねて」というプリントにまとめて、配布した(写真)。例えば、国語の授業で「意味を調べながら、どの生徒も詩を物語り始めていました。自分の読み取った詩の世界を、自分の言葉で伝え合っているのです」と生徒の様子を具体的に伝えた。

「『こういう風にすればいいのか』と感じてもらえるように、学び合いを深める発問や学



写真 林先生が他の教師の授業を回ってまとめた「まなびを訪ねて」。現在まで18号を発行し、今も継続中。学び合いの具体的な手法を共有する情報源となっている

び合う生徒の姿など、できるだけ具体的な場面を紹介し、目指すべき学び合いに近づくにはどうすればよいかを説明しました。これを教師全員に配ることで、学び合いに対するイメージの共有が進みました(林先生)

しかし、中には従来の指導にこだわった教師もいた。そういう教師には、「具体的な指導法は変えなくてもよいが、学び合いの考え方は共有して取り入れてほしい」と伝えた。

教師の足並みをそろえる契機となったのは、2009年度から2年間、小牧市教育委員会から研究指定を受けたことだ。それまで学び合いに抵抗感を持っていた教師も、校内研究に取り組む中で実践せざるを得ない状況が生まれた。永田教頭は次のように話す。

「研究指定を受けたことで、教師全員が同じ方向を向くきっかけができました。学び合いに前向きではなかった教師も、実際に取り入れてみて、子どもが積極的に話し合う姿を目の当たりにし、学び合いのよさを実感できたようです」

ベテラン教師はもともと経験が豊富なため、自分が納得して価値を認めさせれば、学び合いのある授業に転換するのは早かったという。

「教師の中で最も指導法が変わったのは、最初は最も学び合いに懐疑的で、一斉授業にこだわっていたベテランの教師でした(安藤校長)

「授業を語る会」で教科を超えて教師が学び合う

校内研究を通して目指す授業像や生徒像が明確になり、更なる授業改善の必要性を多くの教師が感じたことから、研究指定の終了後も授業研究を続けている。

中心となるのは、月1回の公開研究会だ。特に、その事前検討会に当たる「授業を語る会」は、教師間での学び合いのイメージを共有すると共に、同僚のつながりを深める上で大きな役割を果たしている。かつては教科部会ごとに事前検討会を実施していたが、担当教師が1人しかいない実技教科もあることから、「教科を超えて皆で話し合おう」という会に変えた。

「授業者は『事前検討会』で出された意見を授業に反映しなくてもよい」というルールにしました。いろいろな意見を取り入れて、自分の授業でなくなつては意味がありませんし、アイデアを出す側も『こんな導入が面白いかも』『この課題は分かりづらい』など、思ったことを気軽に発言できます(林先生)

「授業を語る会」への参加は自由だが、校長や教頭を含め、毎回、ほぼ全ての教師が参加している。全員で一緒に授業をつくっている感覚が持てるという。また、会を通して、事前に授業を見る視点が定まるため、事後検討会での協議の論点も絞りやすい。このよう

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

に事前検討会から事後検討会までが上手く連動していることで、教師の参加意識が強くなり、校内研究の効果が高まると考えている。他教科の教師からのアドバイスは、しばしば授業の大きな改善につながるといふ。

「例えば、社会科の教師は資料の提示の仕方に長けているなど、それぞれ得意分野があります。それらを教科を超えて共有することで、『それまでは考えたことがなかったような授業』が実現できるのです」（安藤校長）

教師も生徒も「学びを楽しむ」

学び合いのある授業を通して、生徒はどのように変わってきたのか。まず、教室や廊下での生徒の会話の様子が目に見えて変化しているという。

「全体的に落ち着いたトーンになり、大声で騒ぐ姿があまり見られなくなりました。相手の話をよく聞いて、周囲に気を配れるようになったのは、学び合いの効果の一つでしょう」（永田教頭）

授業では、教師の発問に対し、「単語」ではなく、「文章」で答えられるようになったことも、学び合いと大いに関係がある。

「先生方が子どもの話し合いを深めるために、『なぜ、そう思ったのか』『今の発言はどこに書いてあるのか』など意識して根拠を聞くようにした成果だと思います」（安藤校長）

また、生徒の学びに向かう姿にも変化が見られる。

「授業時間内に共有できなかったことを、授業後、真剣な表情で共有し合う姿が見られるようになってきました。生徒が学びを楽しむようになってきたと感じます」（坪井先生）

生徒の変化の背景には、教師の変化がある。「授業を語る会」や事後検討会では、校長を含めた教師全員が、役職や教科に関係なく、自由に意見を交わし合えるようになった。公開授業以外にも、日常的に授業を見合うことが増えており、教師も学びを楽しんでいる。

「より良い授業をつくっていくことは、苦しいけれど、楽しいことです。そういう経験を共有しながら、皆が前向きな気持ちで研究に臨むことで、指導力が底上げされつつあると思います」（林先生）

同僚性が高まり、コミュニケーションが活発になったことは、生徒にも良い影響を及ぼしている」と安藤校長は話す。

一方、学び合いを適切なタイミングで授業に取り入れるために必要な、生徒を見取る力も高まってきたが、まだ課題を感じることもあるという。

「学び合いを促すための発問やそのタイミングは、生徒の姿をよく見ていないと判断が難しいです。生徒が十分に課題意識を持ち、誰かと相談したいという気持ちが高まったタイミングで取り入れなければなりません。生

徒を見取る力を高めることに終わりはありません。これからも取り組んでいきます」（永田教頭）

6年間の研究を通して実感しているのは、研究の蓄積の大切さだ。生徒や教師は徐々に変化するものであり、継続が重要である。

「全員が参加することで、教師個人の成果ではなく、学校全体の成果として蓄積される研究にしたいと思います。学び合いにマニュアルはありませんが、校長や管理職が異動しても研究を継続するための研究のマニュアルはつくりたいと考えています」（安藤校長）

安藤校長が考える学び合い

学び合いの基本は、相手の話をきちんと聞くこと。教師同士、教師と子ども、生徒同士に壁があったら話を聞こうという気持ちになりません。学級や学校の雰囲気づくりが学び合いの土台になります。これまでの研究で、教師の支援によって子どもたちが変わることを実感しました。主体性に欠けていた生徒たちが、学び合いを通じて意欲的な集団に変わりつつあります。しかし、学び合いはマニュアル化できるものではなく、我々の研究に完成形はありません。常に発展途上だと意識し、方向性を明確にして全校で取り組んでいきたいと思ひます。

1年生の国語、2年生の数学の授業に見る学び合いの様子

北里中学校の授業で学び合いはどのように取り入れられているのかを紹介する。

1年生国語 授業者・坪井小枝先生

●学び合いのポイント「リンキンボムを使う」

友だちからアイデアをもらい、それがリンクし、化学反応を起こして爆発（ボム）するかのようアイデアを出す手法。4人グループで行い、1人が題材を提供する役 **A**、2人が質問役 **B** **C**、1人がやりとりを評価する（褒める）役 **D** となる。質問のルールは、○か×で答えられるものは出さないこと。

●授業の概要

2学期最初の国語の授業。夏休みの思い出をスピーチするための題材探し为本時の目的。

●授業の流れ

- ①プリントに「夏休みにしたこと」を5つ書く。
- ②その中から、「夏の一品」を決め、スピーチをすることを伝える。
- ③スピーチの中身を広げるために、4人グループで「リンキンボム」をする。

●「リンキンボム」の場面①

- B** 「どうやって質問したらいい？ 思い出すようなことだよな。分かっていることはだめで」
- A** 「そうそう、相手があまり分かっていないこと、覚えていないことを質問しないといけないだよな。うわー、質問難しいね。いや、難しいわ。じゃあいくよ」
- A** 「僕は、夏休みに寝相が悪くて、扉を開けて廊下までいってしまいました」
- B** 「本当に？」
- A** 「本当に」
- B** 「でも、それじゃ何を質問すればいいか分からんやん」
- A** 「そうか。じゃあ、他のものに変えよっか」
- A** 「僕は夏休みにサッカーの夏合宿にきました。これは？」

学び合いのポイント

相手が質問しやすい一品を探すことが思った以上に難しい様子。Aくんはまだ「夏の一品」が決まっていなかった。いろいろな思い出を話す中で、質問が広がりやすい「夏の一品」を探し出そうとしている。

●「リンキンボム」の場面②

- D** 「次は誰がやる？ いいや、自分が評価役をやるよ」
- A** 「私は夏休みに弟と散歩をしました」
- B** 「どこに散歩に行きましたか」
- A** 「引越してきたばかりで、まだ小牧のことを全然知らなかったから、家の周りを散歩しました。スーパーとか」
- D** 「2人がお互いの目を見ながら、具体的な話し合いをしていたのがいいと思いました。また人の話を真剣に聞こうとしたところもよかった。こんな感じ？ じゃあ交代」

学び合いのポイント

「弟と散歩をした」という記憶から出発し、質問によって「引越したばかりで小牧のことを知らない」「まず家の周りを知ろうと思った」といったエピソードや気持ちが引き出されている。

●「リンキンボム」の場面③

- A** 「私の一品は、いとこと撮った写真です」
- B** 「じゃあ、いとこの名前は？」
- D** 「どうでもいい質問じゃない？」
- A** 「上の子が○○で、下の子が△△」
- C** 「どこで撮ったんですか」
- A** 「えーっと、どこだっけ」
- D** 「山とか？ 海とか？」
- A** 「キャンプ場。山の中」
- D** 「素敵じゃん」
- A** 「山の中というか、芝生が広がっていたな」
- B** 「じゃあ、山の中のキャンプ場の芝生ってことね」
- A** 「そうね」
- D** 「すごく素敵な一品だと思いました」



リンキンボムの様子

学び合いのポイント

いとこと撮った写真の撮影場所を質問されたことで、具体的な状況を思い出そうとしている。

教師の振り返り

坪井先生「スピーチの題材を決めて内容を1人で考えても、なかなか話が膨らみません。友だちから質問されることで、忘れていたことを思い出してほしいと学び合いを行いました。想定外だったのは、多くの生徒が質問の難しさに戸惑っていたことです。冒頭で、答えが広がりやすい質問の例をロールプレイなどで示すべきだったかもしれません。ただ、良い質問をすれば、たくさんのお返事が返ってくるという経験から、最終的に『質問の内容によって答えが変わる』ことを多くの子どもが理解していました。この経験は、今後、学び合いに良い影響をもたらすと思います」

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

2年生数学 授業者・佐藤史洋先生

●学び合いのポイント「グループ活動を効果的に活用」

授業は、コの字型の机配置で始まり、途中で2回、4人でのグループ活動を行った。グループ活動の回数やタイミングは、事前に決めていたわけではなく、生徒の反応を見て、教師が導入を判断した。

●授業の概要

連立方程式を利用して、距離・速さ・時間の問題を解く。問題文が長くなり、数量関係が把握しにくいいため、不得意な生徒が多い課題。
・学習課題

全長10kmのハイキングコースを歩きました。スタートからコースの途中にある滝までは時速6km。滝からゴールまでは時速2kmで歩いて、4時間かかりました。スタートから滝までの道のりと滝からゴールまでの道のりを求めなさい。

●授業の流れ

- ①本時の課題を提示し、生徒が読み上げて確認する。
- ②距離・速さ・時間の関係を簡潔に復習した後、個別に問題に取り組みせる。
- ③ほどなく「先生、やり方が分かりません」という発言があった。これを受けて「グループでやってみましょう」と、グループ活動に入る。

※生徒が新しい問題に迷い、誰かと相談したくなったタイミングを見計らってグループ活動に移行した。

●グループ学習の様子

- A 「僕は『みはじ（道のり・速さ・時間）』とか習ってないから」
- B 「前にやったやん（笑）」
- A 「知らないって」
- C 「全長が10km。距離÷速さだから、 $x \div 6$ 、 $y \div 2$ 。6と2の分母をはらうために最小公倍数をかけて……。あ、間違えた」
- D 「（隣で見ていた生徒が）何で。そっちで合っているよ。 x を引くとこれでなくなるやん。『 $y - 3y$ 』でマイナスやん」
- C 「なんて、もう1回言って」
- D 「（線分図を指しながら）ここからここまでが10kmで、ここからここまでが4時間。滝からスタートまでの時間が $\frac{x}{6}$ で、滝からゴールまでが $\frac{y}{2}$ 。これは時間を求めている」
- C 「そうか、これ時間だったの？」
- D 「そうそう。だから……」

——— 学び合いのポイント ———

何となく立式までたどり着いたが、今ひとつ x と y の意味を理解できていなかった。隣の生徒の一言をきっかけにできた立式の手順とその意味を再確認している。生徒の理解度には差が見られるが、グループ全員でこれまでの知識を出し合い、立式にたどり着こうと試行錯誤する姿が他のグループでも見られた。

●全体での学び合いの様子 T: 教師

グループ学習が始まり20分ほどしたところで、机をコの字型に戻す。立式までの手順でつまづいている生徒が多かったため、グループで話し合ったことを発表してクラス全体で確認し、「みんなの考え」に発展させる。

- T 「じゃあ、みんな確認して」
- E 「何回やっても答えがマイナスになります。プラスですか？ $x + y = 10$ しかできません」
- T 「 x は何かな？ スタートからの道のり。 x はスタートから滝、あともう一つの式をどうするか」

F 「 $\frac{x}{6} + \frac{y}{2} = 4$ 時間」

T 「みんな、この式はよかったかな？ じゃあ、どんな式ができた？」
(なんとなくうなずく生徒が見られるも、まだ納得しきっていない様子)

G 「まだ分かりません」

T 「ちょっと聞いておきたいのだけど、 $\frac{x}{6}$ って何？ 単位は何？」

◎佐藤先生が生徒のつまづきを黒板で線分図に示しながら、一つひとつ説明。立式の手順とそのポイントを再確認した。その後、新しい問題を配り、もう一度、立式をさせる。個々に考えさせた後、再びグループ活動を行った。

授業後の研究協議で出た先生方の発言

◎学び合いでは、学ぶのは生徒なので、自分の始めたいところからスタートして、自分のペースで進める。だから、ゴールもプロセスも個々に違います。学びとはたどり着いた先得るのではなく、過程で生じるものだと思います。教師は当然、任せっ放しでよいわけではなく、生徒を主役にしながら力を付けてあげたい。では、この授業で付けなければいけない力とは何だったのでしょうか。

◎「 $x + y = 10$ 」が出た時、それに対して先生は「 x って何？ 単位は何？」などと発問しました。ここを分かったふりをしている生徒に「 x と y を使うのか。では、この場合、何を x にして、何を y にするの」と問い、もっと何が問われているのかを確認させたり、更に「どうしてそうするのか」と掘り下げることができたのではないかと思います。

◎生徒が考えながら取り組むことが大事。生徒は「分からない、分からない」と言いながらも、最後まで問題に向き合っていました。なぜそれができたのか。学力に差はあっても、その差を把握して、支え合うクラスをつくることでできているからだだと思います。そこがよかったです。

教師は生徒をつなぐ役目に徹し 自らかかわり、学ぶ力を育む

長野県 松川町立松川中学校

松川町立松川中学校では、学級全員が主体的に授業に参加し、友だちとかかわる中で、人と協力をできる力を付けてほしいと学び合いに取り組む。出来る生徒が出来ない生徒に「教える」のではなく「互いのためになる」ことを意識させた結果、「コミュニケーション力や課題解決力が高まっている」。

生徒の現状と 学び合いで特に付けたい力

- 言われたことはきちんと取り組むが、自ら課題を見つけ、解決（改善）しようとするのが苦手
→ 自分から気付いて行動し、人を助け、また人に助けてもらうことのできる力
- 友人関係が固定しがち
→ 共通の課題解決を通して、新しい人間関係を築いていく力

学び合い導入の経緯

- 5年前に、当時の研究主任が松川中学校の理科に学び合いを取り入れる
- 研究主任の異動後は、数学と理科を中心に学び合いを継続
- 現在は、学び合いを全校の研究テーマに据え、全教科で学び合いの実践に向けて取り組む

学び合いの概要

- 各教科の特性を考慮し、学び合いを実践できる場面を考えながら取り入れる
- 数学の授業では、年間コマ数の9割が学び合い

学び合いの工夫

- 教師は学級全体を見渡しながら、理解できていない生徒がどこに動けばよいかわかるように、適切なタイミングで声を掛ける。その際、発言はある特定の生徒にではなく、全体に対して語りかける
- グループは固定せず、立ち歩いての相談も含め、生徒が自分の考えで答えを追究する時間を保障する
- 生徒が追究できる課題を設定する

School Data

◎ 1957（昭和32）年開校。長野県の南部に位置する。2005年度から3年間、文部科学省「学力向上フロンティア」の拠点校に指定される。自らの心に問いかけながら清掃を行う「自問清掃」が伝統。



校長◎ 帯刀 昇先生

生徒数◎ 440人 学級数◎ 15学級（うち特別支援学級2）

所在地◎ 〒399-3303 長野県下伊那郡松川町元大島 3293

TEL◎ 0265-36-2073

URL◎ <http://www.ch-you.co.jp/users/matukawajh/>

公開研究会◎ 未定

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

クラス全員参加の学び合いで
人とかがわる力を伸ばしたい

松川町立松川中学校が学び合いを取り入れ始めたのは、5年前のことだ。当時の研究主任が上越教育大学院で学び合いを研究し、同校に赴任した際に自分の理科の授業で取り入れたことが最初だった。以降、教師間に学び合いの手法が少しずつ広まった。

帯刀昇校長が赴任した2010年度には、目指す学校像の一つに「居場所や存在感があり、関わり合いを広げる学校」を掲げ、全校体制で進めるべく本格的に取り組み始めた。帯刀校長は、学び合いを授業づくりの軸に据えた理由を次のように話す。

「中学校時代は生徒たちがそれぞれ悩みを抱える時期です。友人関係などで内向的になることもあります。だからこそ、人とかがわり合いながら成長してほしいと思います。人を助け、人に助けられる経験ができる学び合いは、生徒同士のかかわり合いの場面として最適だと考えました」

研究主任で数学科担当の中島清貴先生は、授業にこそ生徒同士がかかわる場を設けるべきだと話す。

「授業は1日5時間以上もあります。学び合いを取り入れれば、クラス全員が授業に主体的に参加し、みんなで協力して問題解決に当たる経験を積み重ねることが出来ます。私

はかねてから、中学校数学のレベルならば、教師が教え込まなくても、生徒同士で助け合えば解決できるのではないかと思っていました。生徒が互いの力を合わせて問題を解決していく学び合いの考え方と合致していました」

教えるのではなく、
自分の学習になることを意識させる

10、11年度は、年度当初に大学の研究者を講師に迎え、生徒に対して、学び合いの意義や方法などを説明し、模擬授業を行った。

2・3年生は1年生の時から学び合いを授業で行っている中で、特に教師が指示をしなくても、自然とグループができ、スムーズに進む一方、1年生は異なる。1年生の初期の授業では、4人グループや、違う小学校からきた友だちに説明するなど、条件を付して、かかわり合いを持ちやすいようにしている。北原雅浩教頭は、次のように話す。

「人間関係がまだ出来ていない学級開きの最初から学び合いを取り入れることで、互いを知る機会が増え、クラスづくりが早く進みます」

中島先生は、学力にかかわらず、どの生徒も「学び合う」という意識が持てるよう、声掛けに注意している。

「学び合いというと、『出来た生徒が出来ていない生徒に教える』というイメージがある



松川町立松川中学校校長
帯刀 昇
Obinata Noboru

「人とのかかわり合いの中で成長していくことできる、人間関係づくりの上手な大人になってほしい」



松川町立松川中学校教頭
北原雅浩
Kitahara Masahiro

「人は一人では生きていけない。だからこそ、コミュニケーション力を育めるような学び合いにしたい」



松川町立松川中学校
中島清貴
Nakajima Kiyotaka

研究主任、3学年担任、数学科担当
「人の良いところを見つけれられるような大人になってほしい」

と思います。私は『教える』ということが言葉の端々に出ないようにしています。『まだ頑張っている人がいるから、協力してやろうね』と言います。決して『早く出来たなら、教えてあげなさい』とは言いません。『全員が分かる』という目標に向けて、生徒が自主的に動くことで、全ての生徒に学びがあると考えるからです。学んだことを自分の言葉で他人に説明することで、自分がしっかり理解していることを確認し、理解を更に深めることができます。こうした考えから、他人に説明することは、その人を助けるだけでなく、自分の学習のためにも常々指導していただきます」

中島先生の授業では、年間コマ数の9割以上を学び合いで進める。本時の課題を出した

ら、後は生徒同士の学び合いの時間となる。グループは固定しておらず、生徒は教室内を自由に歩き回り、何度もグループ替えをしたり、グループ間を移動したりしながら話し合う。

学び合いの間、中島先生は生徒のさまざまなたつまずきを確認しながら、関連する生徒の理解や気付きをつなぐことに徹し、「あそこのグループは○○な工夫をしています」などと、理解の進んでいないグループの側で言うなどしている。

「指示することや知識を教えることはすぐにでも出来ます。しかし、どこにどのような情報があるのか分かるようにし、生徒が必要に感じた時に、それがある場所に行けるような環境をつくるのが、教師の役目です。『あのグループに聞いてみたら』とは指示しません。生徒には学校で自ら人とつながり学んでいく力を身に付けてほしい。それは、将来、生徒が学びたいと思った時に必要な力になります」

クラス内の問題は自分たちで話して解決

中島先生自身は、学び合いを授業に取り入れて4年が経つ。中島先生の授業を見ると、教室のあちこちで話し合う姿が見られ、問題が解けると「やった！」とガッツポーズをする生徒、他の問題に取り組みたいという生徒

も見られた。

今後の課題は、この「解けた」を学力としてどう定着させるかだ。現在は、授業の最後に問題集の該当ページを示し自学自習を促しているが、宿題という形にはしていない。

「学習意欲や自己肯定感は随分高まりました。次は、それらを学力に結び付けられるような取り組みをしていきたいと考えています」(帯刀校長)

11年度は学び合いの実践が校内研究のテーマであり、各教科の重点目標に学び合いを掲げている。しかし、全ての授業で取り入れられているわけではなく、現在は数学と理科が中心で、他教科からは「どのように取り入れればよいのか」という声がある。また、保護者からは、学び合いで学力が付くのかという質問もたびたび出ている。

「学力は下がっていませんが、上がったという実績はまだ出ていません。ただ、クラス全員で全員を伸ばし合う集団に育ってきているので、その効果が必ず学力にも表れてくると考えています。同僚や保護者の理解を得ながら、粘り強く進めていく必要があります」(北原教頭)

一方で、コミュニケーションや課題解決の面では確かな成長が見られると、中島先生は話す。

「例えば、以前は、今日の給食当番は誰か、休みだからどうすればいいのかと、教師に尋

ねてきていましたが、そうしたことはなくなりました。クラス内の問題は自分たちで解決できる力が付いてきていると思います」

同校では「自問清掃」が伝統だ。担当の場所を決まっているが、汚れている箇所を自分で探して清掃する。学び合いはこれと共通する面が多いと、帯刀校長は話す。

「『自問清掃』でも、『学び合い』でも、自ら気付き動くことを、また協力し合うことを大切にしています。これからも生徒の人間的な成長に寄与するような活動を続けていきたいと思っています」

帯刀校長が考える言語活動

学校は勉強だけを出来るようにする場ではありません。友だちや先輩、後輩と集団で活動し、人間関係をつくる力を付け、集団の中で生き抜く術をつかむことも重要です。学び合いの授業を見ていると、いろいろな生徒とかわり合って、学びが進んでいる様子が分かります。「全員ができる」ことを目標とした学び合いでは、分からないことがあれば友だちに尋ねるといった行為が不可欠です。かわり合いを生むきっかけをつくる学び合いは、普段、教室で存在感を出せないような生徒にとってもコミュニケーション力を育む場になると考えています。

3年生の数学の授業に見る学び合いの様子

実際の授業の中で、学び合いはどのような工夫と共に実践されているのか。

中島先生の授業を通して、生徒が意見を交わし合い、個人や集団の考えを深めていくプロセスを追った。

3年生数学 授業者・中島清貴先生

●授業のねらい

全員が二次方程式 $x^2 + px + q = 0$ の式を、 $(x + m)^2 = n$ の形に変形して解くことができる

授業の流れ

1 前時の復習 10分

- 二次方程式の問題を2問出し、各自で取り組む。

- ① $(x - 2)^2 = 7$
- ② $(x + 3)^2 = 16$

2 本時の課題 5分

- 今回の課題を2問、提示する。

- ① $x^2 - 8x + 4 = 0$
- ② $x^2 - 4x - 3 = 0$

- このままの式では解き方が分からないので、前時に取り組んだ式の形に変形して解くことを確認する。
- 評価問題として、 p 、 q の数字を変えた二次方程式2問の正解が目標であることを伝える。

3 学び合い 20分

- 課題解決に向けて学び合いが始まる。スタイルは自由。グループは特に指定していない。



課題が提示されると、生徒は隣りや後ろを向いて話し合いを始めた。しばらくすると、席を立ち上がり他のグループに行くなどの動きが見られた

4 定着 15分

- 評価問題を2問出し、各自で取り組む。
- 問題が解けた生徒は教師のところに持っていき、答え合わせをする。
- 1問正解ごとに、座席表に○を付け、全員が正解したら終了。
- 問題集の関連ページを伝える。

指導の工夫、心掛けている点

- 本時で付ける力を明確にし、目標を生徒と教師で共有する。この時、どのように評価するかもはっきり伝える。

- 課題はクラス全員が解けるレベルと量にする。

学び合い中にグループを見て回ると、生徒の反応がダイレクトに分かる。数学では、こういう数字にすると理解できなくなる、こういう形にすると困ってしまうことが分かるので、次の課題設定に生かす。

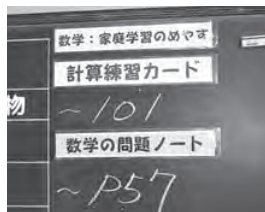


黒板に本時の達成目標と問題を提示する

- 一人で解いている生徒がいても、すぐに声をかけたりしない。自分のペースがあると捉え、まずは様子を見守る。
- 教師の発話は、「教える」内容ではなく、生徒に「気付かせる」ものとなるようにする。
- 「出来た生徒が出来ない生徒に教える」という意識を持たせない。
- 全員が理解することにこだわり、「みんな、できたかな」と適宜声を掛ける。
- 追加の問題は、あらかじめ提示するのではなく、学び合いの状況に応じて示す。

追加の問題を先に提示してしまうと、できた生徒が自分の学習にいてしまい、学び合いから離脱してしまう。追加の問題は用意しておくが、様子を見て提示する。

- 評価問題も全員の正解が目標。ここでも学び合いはOK。



教室の後ろにある黒板には、本時の課題を復習できる問題集の該当ページが書いてある

■ 学び合いの様子 □: 教師

1 課題① $x^2 - 8x + 4 = 0$ について、個々のペースで学び合いが始まる。男女別々で各2グループができる。1人で解いている生徒もいた。

A 「8の半分の4を2乗した数の16を両方に足してから、左辺は因数分解して、右辺は普通に計算して。そうすると、二次方程式で $x^2 - 8x + 16 + 4 = 16$ になる」

B 「どうしてプラスになるの？」

A 「これは2乗するからマイナスでもプラスでもいいけれど、8の半分の数の2乗を両方に足して……」

B 「どうして足すの？」

A 「僕も最初はいきなり因数分解すればいいと思ったけどできなかったから、因数分解ができるようにしないとイケない。右辺は0だから、左辺の4を右辺にもってくと-4になる。でも、まだ因数分解できないから、できるような形にするために左辺に4の2乗を足して、右辺にも4の2乗を足さないといけない。分かる？」

B 「なんで半分にするの？」

A 「これを半分にすることで、因数分解ができるようになる（式を書いて説明）」

B 「なるほど、そうなんだ」

A 「だから、-4で計算すると、ここが $-8x$ ……」

B 「分かった！」

A 「この半分の2乗だとうなる（Bが式を書き始める）。そう」

B 「例えば、8が6だったら3？」

A 「そう、3の2乗で9だよ」



生徒は自分の解き方をノートに書きながら、友だちに説明し、それを聞いていた友だちは質問を返す。

教師の振り返り

帯刀校長「普段、他の生徒とあまり話さず、気になる女子生徒がいました。最初は一人で解いていましたが、後半に男子生徒に質問をされて、答えていました。授業後に女子生徒と話したところ、その男子生徒のことを『理解は遅いけれども、ゆっくり説明すればきちんと分かる』と言っていました。クラスに溶け込めていないと心配していましたが、クラスメートの理解のペースまで把握していたことをうれしく思いました」

2 質問を受けた生徒が、うまく質問に答えられず、自分の理解があやふやだと思い、他の生徒に質問しに行く。

C 「ここがマイナス2でしょ」

D 「どうして？」

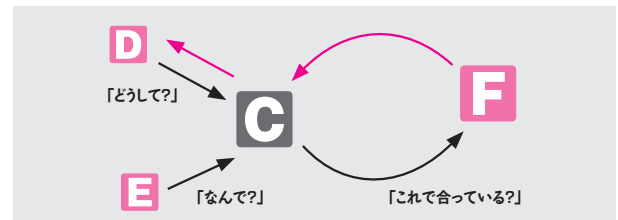
C 「(説明しようとするが、言葉が出てこない) ちょっと待って」

E 「なんで? なんで?」

C 「ちょっと待って。分からなくなってきた。(側で他の生徒と話していたFをつかまえて、書いた式を見せながら) これで合っている? Dさんが合っている?」

教師の振り返り

中島先生「理解が出来ていない生徒のつぶやきが複数集まることによって、出来ている生徒の理解が揺らぎます。学び合いでは、できる生徒が説明することによって、自分の理解を再度確認させられる場面が多々あります。結果的には、自分の解答が合っていたことに気づき、Cさんは改めて自分の解答に自信を持ってDさんとEさんに説明していました」



3 本時の課題が終わった後、評価問題に入るまでの間に、生徒が先生に他の問題をやりたいと言い出した。

D 「一応理解できたけれど、少し疑問が残ります。数字を変えて、他の問題をやってみたいです」

C 「自分でやればいいじゃん」

D 「でも、自分では問題を作れないよ」

F 「では、ここに新しい問題のプリントを置いておきます。でも、時間になったら答え合わせを始めます」

すぐに、C、D、Eが新しい問題を取りに行く。

教師の振り返り

中島先生「生徒の『分かった』をいかに定着させるかが、今後の課題です。他の生徒から『自分で数字を変えて問題を作ればいいんだよ』という声が出ていましたが、授業の最後に彼の発言をもう一度伝えれば、自学自習ではどうすればよいかの気づきに出来たと思います。子どものよい発言を丁寧に拾っていききたいと思います」



何人かの生徒は、追加で新しい問題のプリントが教卓の横に置かれると、すぐに取り組み始めた

授業力向上の「共通語」として 学び合いを少しずつ導入

佐賀県 佐賀市立東与賀中学校

佐賀市立東与賀中学校では、学力向上とコミュニケーション能力の育成を目指し、学び合いを取り入れている。同時に、教師が教科の壁を超えて授業力を高める手段とも位置付け、生徒の状況や教科特性などに応じて、一斉指導や授業中の個別指導も併用している。

生徒の現状と 学び合いで特に付けたい力

- 授業中に発言したり、自分から新たな友人関係を築いたりすることが苦手
 - 固定化しがちな友人関係を広げて、自分の考えを表現したり、周囲とかかわろうとする力
- 授業に対して受け身。学力の二極化も見られる
 - 全員が授業に主体的に参加し、各時間の目標に到達できる力

学び合い導入の経緯

- 2008年度から取り入れてきたが、研究が次第に形骸化
- 11年度、「学び合いは授業力向上のための共通言語」と捉え直し、改めて教師全員が取り組み始める

学び合いの概要

- 数学科と社会科は、ほぼ毎時間学び合いを柱とした授業を行う。他教科は単元に合わせて部分的に導入
- 全教師が参加する授業研究会を毎月実施

学び合いの工夫

- 一斉授業の良さも尊重し、各教師が出来るところから少しずつ学び合いを授業に取り入れる
- 学び合いの最中であっても、生徒の理解度に応じて個別指導や全員への説明の時間を設けることもある。板書も適宜行う
- 「『学び合い』通信」を発行したり、積極的に授業を公開したりして、保護者の理解を得る

School Data

○1947（昭和22）年開校。有明海を臨む県南東部に位置し、近接型小中一貫教育を進めている。自転車通学の生徒は皆、校則通りヘルメットを着用するなど、生徒は素直で、校内は大変落ち着いている。



校長◎野口敏雄先生

生徒数◎290人 学級数◎10学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒840-2221 佐賀県佐賀市東与賀町大字下古賀1127-1

TEL◎0952-34-7102

URL◎<http://www3.saga-ed.jp/school/edq10451/>

公開研究会◎未定

生徒全員が学ぶ喜びを感じられる授業をつくりたい

佐賀市立東与賀中学校は、2008年度に学び合いを始めた。

その背景は二つある。一つめは、生徒の学力向上だ。授業中、どの生徒も落ち着いて教師の説明を聞いているが、全体的に意欲に乏しく、受け身な点が課題だった。ノートを写すこと自体に力を入れ過ぎて、肝心の授業の内容を理解していない生徒も見られるなど、学力にも大きな差が見られた。

二つめは、コミュニケーション能力の育成だ。生徒の大半は一つの小学校の卒業生であり、幼少期から互いを知っている。固定された人間関係の中で育ったためか、自分にとって居心地の良い、限られた友だちとしか交流しない傾向が目立った。

10年度まで3年間続けてきたが、学び合いに対する教師の意識に差があり、活動が学校全体に広がらず、次第に形骸化してしまった。そこで11年度、学び合いを改めて校内研究の柱とし、教師全員が取り組む体制を整備。研究部会を設け、月1回の授業研究会には管理職を含む全教師が参加するようにした。野口敏雄校長は学び合いを、生徒だけでなく教師の授業力をも伸ばすものと位置付ける。

「本校が目指すのは、生徒全員が学ぶ喜びを感じられる授業づくりです。学力下位層の

生徒を伸ばすだけでなく、上位層の生徒の学習意欲にも応えなくてはなりません。おのずと、教師には新たな工夫が求められます。学び合いは、こうした課題の解決に最良の手立てだと思えます。私は、学び合いを授業力向上の『共通言語』にしたいと考えています。教科の特性によって導入しづらい場合でも、生徒の見取りや発問の工夫など教科を超えて高め合えることがたくさんあると思えます」

「生徒を信じる」という信念から指導法や声掛けに工夫を重ねた

同校の学び合いは数学科と社会科を中心に進められている。数学の授業では、当初、教師は課題を提示するだけで解き方などは一切説明せず、生徒だけで学び合いをさせていた。生徒同士の交流にも介入せず、生徒が相手を自由に見付けて話し合うスタイルにしていた。しかし、仲良し同士で話し合うばかりで、交流は教室全体に広がらなかった。私語に熱中したり、解けない問題を友だちに相談せず教師に質問したりする生徒もいたという。数学科担当で研究主任の吉岡修先生は、その頃の思いを次のように話す。

「教師の想定通りに動かない生徒が気になることもあります。しかし、教師は生徒を信じようと思いました」



佐賀市立東与賀中学校校長
野口敏雄 Nominchi Toshio
「生徒を信じ、先生方を信じて、少しずつ着実に取り組みを進めていきたいと思います」



佐賀市立東与賀中学校教頭
貞包浩洋 Sakakane Hiromi
「生徒の日々の変化を着実に見取り、褒める時も叱る時も常に真剣でありたい」



佐賀市立東与賀中学校
吉岡修 Yoshitaka Osamu
研究主任、3学年担任、数学科担当。「他者を思いやり、互いに力を合わせることに素晴らしさを伝えたい」



佐賀県教育庁 佐城教育事務所
指導主事
紫村直美 Shimura Naomi
「目標に向かって共に努力し、みんなが高まる集団をつくっていききたい」

吉岡先生は、次のような工夫を重ねた。

- ◎ 授業冒頭の5〜10分に、教師が解き方を説明する時間を設ける。説明は、その授業のポイント一つに絞る、極力簡潔にする。
- ◎ 教師の説明の後、5分間は生徒一人ひとりによる自力解決を行う。

◎ 誰と話し合うかは生徒の自由だが、床に座ったり、立ったまま学習しなくてもよいように、前後左右の四つの机をつけ、話し合う場所をつくる。

◎ 中・上位層の生徒でもなかなか解けない問題には、教師が話し合いに加わる。ただ、

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第3回

学び合い—クラス全員が学びに参加する授業—

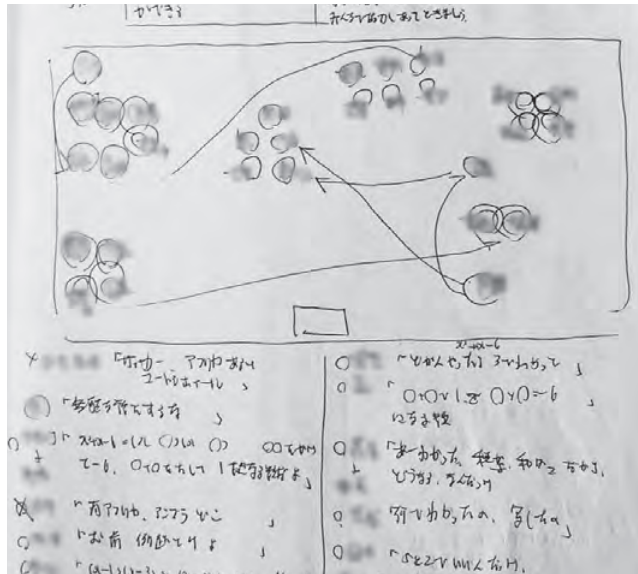


写真 吉岡先生は、授業中の生徒の動きと生徒同士の会話内容を毎時間メモしている。「一斉授業よりも、一人ひとりの様子を意識できるようになったと思います」(吉岡先生)

教師が示すのはあくまでも解き方のヒントであり、生徒自身に解かせる。

◎教師は問題の番号だけを板書し、解けた生徒は、途中式も解答も全て自由に黒板に書く。その解答に対して、他の生徒は誤りを指摘したり、訂正したりする。

◎学級全員が問題を解けることを重視。授業の最後に行く確認テストでは合格点を8割とし、一人でも到達しない生徒がいれば、「全員出来たかな」「なぜ、全員が合格点を取れなかったんだろう」と語り掛ける。

◎個々の生徒が誰と交流していたかを、毎回記録し(写真)、課題の難度を調節する。「課題を比較的難しく設定した授業では、

仲の良い生徒以外にも、多くの友だちと交流することが見えてきました。そこで、単元の終わりなどに1問、上位層の生徒が『背伸び』をしてやつと解ける課題を設け、多様な交流を促しています」(吉岡先生)

3か月ほど経った頃、特に下位層の生徒の様子に変化が表れた。4月にはノートさえ取らなかった生徒が、教科書の問題文を書くようになり、6月には、解けたところまでノートに書き、「どこが分からないか」を自分で説明できるようになった。分からないことを恥ずかしがり、自分から聞きにいかなくなった生徒も、他の生徒に聞きに行くようになった。

同校の指導に当たる佐賀県教育庁指導主事の紫村直美先生は、学級の一人ひとりが主体的に学習に取り組むようになったと話す。

「課題が解けた生徒は、自分から進んで解けない生徒に説明するようになりました。解けない生徒も『なぜ?』『もう一回言つて』と尋ね、懸命に分かろうとしています。吉岡先生の『一人も見捨てずに、誰もが課題を解けるようにする』という考えが、生徒の間に広がった結果だと思っています」

「自分にも出来る」という意識が教師を変える

学び合いに対する教師の関心も、

吉岡先生らの授業を見て少しずつ高まっていった。

「教師が全く介入しない、生徒同士だけの学び合いの実現は、確かに理想です。しかし、一斉授業の経験しかない先生方にとっては、抵抗を感じることもあると思います。授業では、板書や教科書の説明など、一般に学び合いでは良しとされない方法も取り入れます。それを見た先生は『説明してもいいんだ』『黒板を使ってもいいんだ』と感じたのでしょう。授業に取り入れる先生が少しずつ増えていきます」(吉岡先生)

保護者からは、学び合いで本当に学力が付くのかを疑問視する声も聞かれた。そこで、学び合いの紹介に特化した学校通信「『学び合い』通信」を定期的に発行し、更に「学校だより」にも学び合い専用のコーナーを常設するなど、理解を呼び掛けてきた。学び合いによる生徒の変化を目にする機会を増やせば、保護者の理解はもつと得られるだろうと、貞包浩洋教頭は期待を寄せる。

「保護者の心を動かすには、取り組みを説明するだけでは不十分です。実際に学び合いを見て、一斉授業の時と比べて生徒の表情がいかに違うかを実感してもらうことが重要だと考えています。そのため参観日には、学び合いを取り入れた授業をなるべく多く行っています」

こうした改善の積み重ねが、全教師の授業

野口校長が考える学び合い

生徒にどのような力を付けるか、そのための指導はどうあるべきか。これについて、教師は誰もが考えを持っています。校長の考えを一方向的に押し付けるばかりでは、先生方の気持ちは一つになりません。どの先生も主体的に取り組んで初めて、学校全体の取り組みとなり、大きな力が生まれるのです。

先生方一人ひとりが学び合いを共通言語として、教科の枠を超えて他の先生方と積極的に意見を交換し、落ちこぼしも伸びこぼしもつけない授業をしていただきたい。学校運営の責任者として、先生方がそうした授業づくりを試行錯誤できる環境をもっと整えていきたいと思えます。

力向上につながると、野口校長は考えている。「先生方の意識には依然として違いがありますが、どの教科の先生方からも、『こういう形で授業に取り入れたい』という計画が出るようになりました。これは、先生方がそれぞれの授業スタイルを見直し、より良くしようという気持ちの表れです。50分の授業時間のうち、10分でもいいのです。各自のペースで、出来るところから着手していつまでもいい。そして、12年度の半ば頃までには、全授業で何らかの学び合いを行うことを目指しています」

1年生の社会・数学の授業に見る学び合いの様子

実際の授業の中で、学び合いはどのような工夫と共に実践されているのか。

東与賀中学校の授業を通して、生徒が意見を交わし合い、個人や集団の考えを深めていくプロセスを追った。

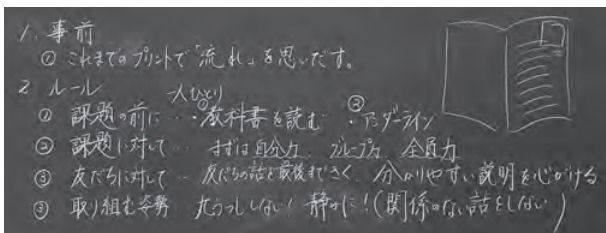
1年生社会 授業者・貞包浩洋教頭

●本時の目標

飛鳥時代の政治と文化を理解する

●授業の流れ

- ①学び合いで大切なことを板書し、学び合いとは何かを振り返る（15分）
- ②飛鳥時代の制度などについて空欄を埋めるワークシートを配布し、前後左右の席に座る4人がグループになって解く（30分）
- ③確認問題を各自で解く（5分）



本時では授業冒頭の15分に、黒板を使って学び合いのルールを確認した。「まず自分で考える」「友だちの答えを写さない」などのポイントが整理されている

●グループ学習の様子 T: 教師

「改新の詔」と「班田収授法」を混同し、「公地公民」の意味をつかめていないグループに、貞包教頭が加わる

A 「『班田収授法』って、一定の比率で人民に田を分け与える制度のことだから……」

B 「えっ違うよ。それは『改新の詔』じゃないの？ あれ、租・庸・調かな？ 先生、どっちだっけ？」

T 「自分の意見を言う前に、友だちの話を最後まで聞くことが大切だったよね？ 詔は、天皇の言葉という意味。その空欄に入るのには制度の名称で、その制度を定めたことされるのが『改新の詔』だよ」

A 「『班田収授法』によって『公地公民』になったんだよね？」

T 「何を見ている？ 資料集か。板書をよく見よう。まず教科書を読むんだよね。その方が分かりやすいよ」

▶指導の工夫

「1年生では、学び合いの仕方を身に付けることを重視しています。本時は夏休み明け1回目の授業だったため、冒頭で学び合いのポイントを振り返りました。また学習面では、社会科の基礎である資料を読み取る力を育もうと、ワークシートの問題を教科書と資料集の両方を見ないと解けないようにしています。授業中での理解が厳しいと判断した場合は、教師が話し合いに参加したり、一斉指導の時間を設けたりしています」（貞包教頭）

紫村指導主事が見る学び合いのポイント

「教えられた生徒が教えてくれた生徒に『ありがとう』と伝える姿がどのグループにも見られました。誰かに何かをしてもらったからお礼を言う。これは人間関係づくりの基礎であり、要だと思っています。学び合いを通してコミュニケーション能力が育まれていることを実感しました。また、学級でトップを争う生徒同士が互いの進み具合を気にして様子を見に来るなど、良いライバル意識も芽生えていると感じます」

1年生数学 授業者・吉岡修先生

●本時の目標

個数の過不足の問題を、全員が方程式を使って解くことができる

●授業の流れ

- ①本時の課題を示し、本時の基礎となる小学校の学習内容を確認
- ②教科書の問題5間に取り組む
- ③確認テスト。全員が5問中4問、8割の正解を目指す

●中心となる問題

長イスに5人ずつ座ると座れない人が10人、6人ずつ座ると2人だけ座ったイスが1脚できる。長イスの数を求めよ（長イスの数を x とし、 $5x + 10 = 6x - 4$ を立式し、方程式を解く）

●グループ学習の様子1 T: 教師

- A 「座れない人が10人いるって、どういうこと？」
- B 「座れずに余っているってことじゃない？」
- C 「(教科書の例題を指して) じゃあ、これと同じだね」
- A 「ということは、式にすると10を足すの？ 引くの？」
- B 「足す」
- A 「じゃあ次に『6人ずつ座ると、2人だけ座ったイスが1脚できる』だけど、2人座れるんやったら、マイナス？ プラス？」
- B 「マイナス」
- A 「(本当にそれで良いのか自信がない表情) ……」
グループの会話を聞いていた吉岡先生がヒントを出す。
- T 「どっかで引っかかっているんやろ。図にしてみたらどう？」
- A は、5人ずつ座った図と、6人ずつ座った図をノートに書く。
- A 「5人ずつ座ったら10人座れないから、プラス10」
- T 「5人ずつ座って10人座れなかった。その10人は、5人掛けの図だとどこにいるの？」
- A 「外」
- T 「そう。こういうことだよな？ (図1)」



- A 「じゃあ、6人掛けのイスの場合は、2人しか座れないイスができて、余っている人はいないから…、マイナス2？」
- T 「なぜ2を引くの？ よく考えて」



生徒同士の話し合いに教師が加わり、ヒントを出す様子。それまで数式だけで考えていた生徒たちに、図を書くことをアドバイスしている

3分ほど、図や式を書きながら3人で考える。

- A 「分かった！ 2人を引くってなると、(図2の白丸を指して) この2人を引くことになるやん。だから (図3を指して)、引くのはここに座るはずだった4人なんだよ」



- A 「だから、 $5x + 10 = 6x - 4$ じゃない？」
- ▶ 指導の工夫
「生徒の話し合いだけでは解決できないと判断した場合、教師が話し合いに介入します。考えが行き詰まりかけていたところに、教師が図を描いて考えを整理したり、少しヒントを示したりすることで、生徒の理解は一気に深まります。そうした手立ても生徒同士で行うのが理想ですが、時数の問題もあり、1年生の段階では教師が行う方が良いと考えています」(吉岡先生)

●グループ学習の様子2

問題の解けたAさんは、先ほどと同じ問題でつまづいている他グループに移動し、話し合いに加わった。

- A 「私は-4にした。6人座れるところに2人しか座らないから、4人分余ってるわけやん。その4人を引く」
- EFG 「あ、そういうことね」
- D 「え？ 分かんない。どういうこと？ (隣のEさんのノートのぞく)」
- E 「私のノートを見てもしょうがないよ。自分で考えよう」
- F 「考え方ならいくらでも教えるけど、答えだけ教えるのは反則やろ？」
- D 「…… (一人で解き始める)」

生徒たちはDさんが解くの見守りつつ、各自の課題に取り組む。その後、Dさんは途中まで解いて改めてEさんに質問していた。

- ▶ 指導の工夫
「問題を解き終えた生徒が他のグループに教えにいけば、おのずと教室全体の交流に発展します。また、答えだけを知ろうとする生徒を注意するのは簡単ですが、教師はあえて何も言いません。友だちに注意されてこそ、その生徒は学びに向かうようになります」(吉岡先生)

紫村指導主事が見る学び合いのポイント

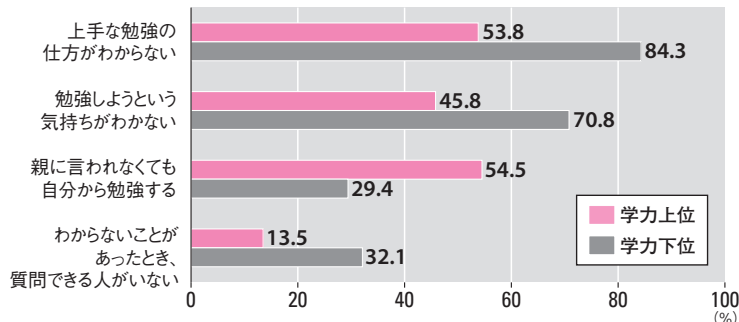
「納得できる説明を求めて、動き回る生徒がたくさんいました。分かるまで友だちに質問し、自力で問題を解く面白さを実感しているからだと思います。答えだけを聞こうとした生徒を、『自分で考えてから質問しよう』と友だちがたしなめる場面も見られ、全員で学びに向かう雰囲気が出来つつあると感じました」

学力層別に見る 生徒の学習動機・理解度と授業方法の関係

生徒の学習動機・学習内容の理解度と授業方法と関係はどのようなものか。学力層の違いに注目して、その実態を見てみよう。

1 学力下位層の8割以上が 上手な勉強の仕方がわからない

Q. 勉強の取り組み方について、次のようなことはあてはまりますか
(回答：中学生、学力層別)



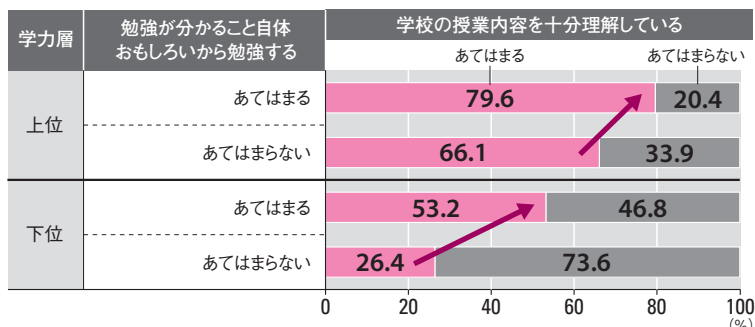
注) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%

出典／Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査報告書」(2009)

生徒の勉強への取り組みを学力層別に見ると、下位層の8割以上が「上手な勉強の仕方がわからない」と回答。「わからないことがあったとき、質問できる人がいない」の比率は、上位層に比べ、下位層で2倍以上高く、下位層のうち約3人に1人が、勉強していてもわからないことがあっても助けを求めることができていない。

2 「勉強が分かることがおもしろい」 生徒ほど、学習内容の理解度は高い

Q. あなたは次のことがどれくらいあてはまりますか
(回答：中学生、学力層別)



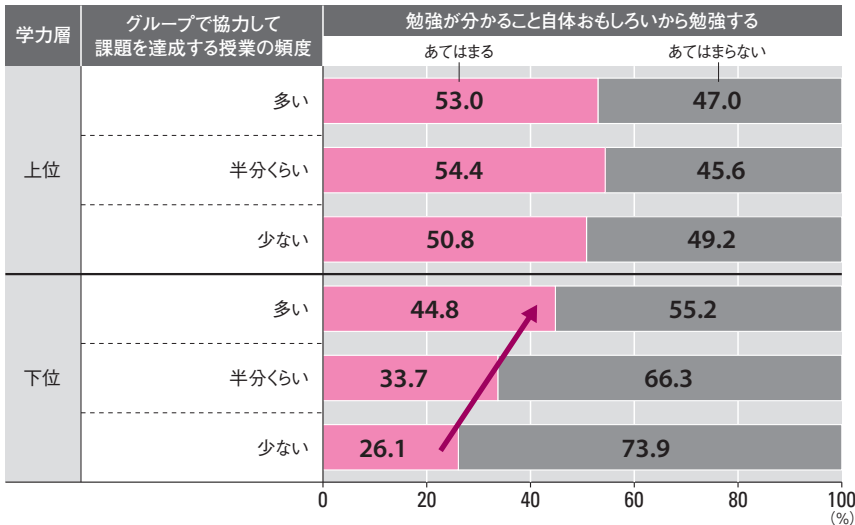
※グラフは上記の調査データを用いて再分析したもの

出典／Benesse教育研究開発センター「神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」(2010)

「勉強が分かること自体おもしろいから勉強する」かどうかと学習内容の理解度の関係を調べたところ、上位層、下位層のいずれの学力層でも、「勉強が分かること自体おもしろいから勉強する」生徒ほど、学習内容の理解度が高い傾向が見られた。

3 グループで協力して課題を達成する授業が多いほど、 下位層は勉強をおもしろく感じる

Q. あなたは次のことがどれくらいあてはまりますか
(回答：中学生、学力層別)

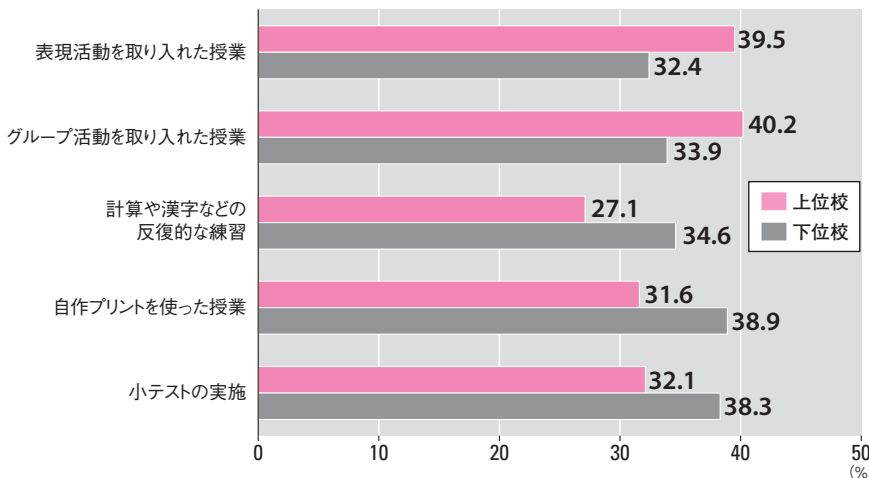


※グラフは上記の調査データを用いて再分析したもの
出典／Benesse教育研究開発センター「神奈川県の公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」(2010)

「勉強が分かること自体おもしろいから勉強する」(学習動機)と、グループで協力して課題を達成する授業の頻度の関係を、生徒の学力層別に見たところ、学力上位層では、グループで協力して課題を達成する授業の頻度と学習動機の間には有意な差は確認されなかった。一方、学力下位層では、グループで協力して課題を達成する授業の頻度が高いほど、学習動機が高い傾向が見られた。

4 心がける授業方法が平均学力に応じて異なる

Q. 教科の授業において、どのような授業方法を心がけていますか
(回答：中学校教師、学力層別)



注1) 数値は「多くするように特に心がけている」の%
注2) 学力層は、中学校の校長に「貴校の平均的な生徒の学力は、全国の公立中学校の中でだいたいどれくらいですか」という質問に対して「上のほう」「やや上のほう」と回答した場合は「上位校」、「やや下のほう」「下のほう」を「下位校」とした
出典／Benesse教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査報告書(小学校・中学校版)」(2010)

生徒の平均学力が高めの学校と低めの学校とでは、教師が心がける授業方法に違いが見られる。生徒の平均学力が高めの学校では表現活動やグループ活動を取り入れた授業を心掛ける教師の比率が高く、平均学力が低めの学校では反復練習やプリント学習、小テストを用いた授業を心掛ける教師の比率が高くなっている。

ゲーム要素を活用した学習ソフト 今後の可能性と課題とは？

学校でのICTの活用が広がりを見せる中、生徒個々の学習を支援する手段の一つとして注目されているのが、携帯型ゲーム機だ。ゲームの要素を取り入れつつ学習効果を高める可能性と課題を、学校事例と学会のシンポジウムで探った。

東京都足立区立江南中学校

携帯型ゲーム機の活用で英単語の定着アップ

**音声聞くことが
英単語の定着を高める**

足立区立江南中学校は、電子黒板などのICTを活用した授業づくりに積極的に取り組む。鈴木崇夫校長はその方針を次のように説明する。

「ICTを上手に用いれば、教師にとっては指導の幅が広がり、生徒は情報収集力を高めたり、表現力を磨いたりすることが出来ます。学力向上の可能性を広げるために、今後ICTの導入を進めていく考えです」

2010年には、ICTの可能性を探る一環として、1年生（2学級計41人）を対象に、

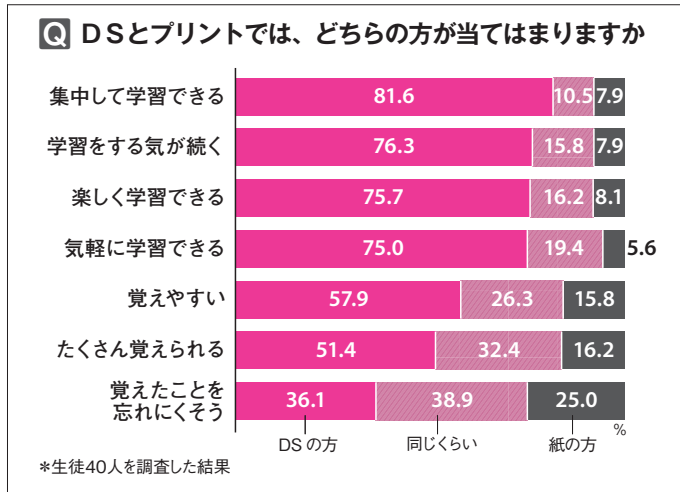
携帯型ゲーム機「ニンテンドーDS（以下、DS）」対応の英語学習ソフトを試験導入した。DSは、毎朝10分間の朝学習で使用。通常の朝学習では、10個の英単語をプリントに繰り返し書かせる学習を行っている。今回の試みでは、1週間、プリント学習を続けた学級と、DSを使った学級では、学習効果にどのような差があるのかを事前・事後テストで調査すると共に、生徒へのアンケートを実施した。DSの活用を決めた理由について、当

時の1年生の担任で英語科担当の平澤圭先生は次のように話す。

「英単語の学習に苦手意識を持つ生徒は少なくありません。DSが英語への関心を高めるきっかけになればという期待がありました」
生徒にDSを活用した朝学習について最初に話した時は、驚きと喜びでお祭り騒ぎのような状態になった。それが、いざ学習を始めてみると、生徒は私語一つせず、普段の朝学習よりも集中して取り組んでいた。その状態は初日だけではなく、5日間続いた。

DSを使った学級と使わなかった学級で事

図 朝学習で感じたこと



後テストを実施すると、DSを使った学級の方が事前テストからの伸びが明らかに大きいという結果が出た。その大きな理由の一つは「音声」だと、平澤先生は考えている。「プリント学習は、英単語の発音が分からないのが弱点です。その点、DSはイヤホンで音声を聴けるため、発音を確認できますし、耳から入ってくることで定着率も高まると考えています」

ゲーム性が生徒の学習意欲を高める効果もある。同校の「英単語コンテスト」では、「合格点をクリアして表彰されたい」という思いから、学習意欲が高まるという。今回使用し

たソフトでは正解数によって「達成度バー」が伸びるなど、ゲームのような達成感を得られる仕組みになっている。生徒へのアンケートでは、プリントよりもDSの方が「学習をする気が続く」「楽しく学習できる」との回答が共に約76%に達し、学習意欲が維持されていることが分かる(図)。

紙に書かせる学習も大事 組み合わせさせた指導を目指す

DSには、自分のペースで学習を進められる良さもある。2学年主任の平野徹子先生は次のように話す。

「進度の速い生徒はどんな次のステップに進めます。分からない問題は繰り返し出題される仕組みのため、苦手な生徒も少しずつ克服して理解を深めていたようです」

通常のプリントでは分かっている単語も決められた数を繰り返し書くことになるが、DSでは正解するとすぐ次の問題に進める。同じ時間で学習できる単語の種類が多く、平澤先生の感覚では2〜3倍の差があるという。

「授業中、『この単語はDSでやった』といった発言が複数の生徒からあったことには驚きました。これまでに『朝学習でやった』という発言は聞いたことがありませんでした。しっかり定着したからこそ、生徒からこういう言葉が出たのだと思います」

今回は英語のみの実施だったが、他の教科

校長
鈴木 崇夫



主幹 数学科担当
古郡 清文



2学年主任、国語科担当
平野 徹子



生活指導、英語科担当
平澤 圭



での可能性は、どう考えているのか。数学科担当の古郡清文先生は次のように話す。

「数学でも反復学習は大切ですが、DSを使えば、きつと英語と同じような効果が得られるでしょう。また、立体図形などの把握でデジタル教材を上手く使えば理解度が高まると考えています」

一方、平澤先生は「紙に書く」という行為も大切な学習だと考える。今後は、ICT教材を活用していく上で、紙とデジタル教材を組み合わせさせた指導をしたいと語る。

使用した学習ソフト 得点力学習DS 中1英語

単語→フレーズ→英文と、段階的に繰り返しトレーニングをすることで、単語や慣用語表現、文法の問題に答えられる力が身に付く。



「得点力学習DS」ウェブサイト <http://ds.benesse.ne.jp/store/>

足立区立江南中学校
生徒数◎151人 学級数◎6学級
所在地◎〒120-0047 東京都足立区宮城 1-8-4
TEL◎03-3911-6413
URL◎<http://www.adachi.ne.jp/users/adkona-j/>

学会
ワークショップ

ゲームニクスについてワークショップで語る

ゲームの要素が学習効果を高めることも可能

ゲームの要素が 意欲や集中力につながる

教育活動の中で、今後、「ゲーム」の要素はどのような役割を果たす可能性を秘めているのか。今回のワークショップのキーワードは「ゲームニクス」であり、前出の「得点力学習DS」はこの理論に沿って開発された。「ゲームニクス」という言葉の生みの親であり、「得点力学習DS」の監修を務めた立命館大映像学部のサイトウ・アキヒロ教授は次のように語る。

「ゲームはマニュアルなしで直感的に楽しむ、無意識に次に進みたくなるように作られています。目の前の問題を次々にクリアしてゴールを目指す過程が、楽しみながら出来るようにプログラムされているのです。そうしたノウハウを集めたものがゲームニクスであり、学習ソフトにも応用できます」

例えば、「得点力学習DS」では、解答入力後、すぐに正解か不正解かが分かり、一定数の正解で次のステップに進む。これは、一

日本教育工学会第27回全国大会ワークショップ概要

- ◎日時 2011年9月17日
- ◎場所 首都大学東京
- ◎テーマ ゲーム要素を活かした学習ソフト開発の事例研究
- ◎プログラム ①5人のゲストによる発表
 - ゲームニクス要素の説明（実際のゲームを使ったデモ解説）
 - ゲームニクスの教育への応用例（教材例）
 - DS朝学習の事例紹介（学校での教材活用例）
 - 学習ソフトの課題と学校での使用現状（海外の事例を交えながら）
 - 学習へのソーシャルゲーム活用事例紹介
- ②会場参加者を交えたディスカッション



写真 研究者や学校関係者など80人近くが参加。実際に参加者がゲームをしながらゲームニクスを体験したり、参加者がパソコンなどからつぶやいた質問や感想がリアルタイムに前面のプロジェクターに映し出されたりと、双方向のコミュニケーションを楽しみながら進化した

主催者



東京大大学院
情報学環
特任助教
藤本 徹

ゲストスピーカー



立命館大
映像学部教授
サイトウ・
アキヒロ



早稲田大大学院
教職教育科
客員准教授
早稲田大高等学院
教諭
武沢 護

般のゲームで敵を倒しながらゴールを目指す過程に似ている。まず最終目標が明確に見え、そこに到達したいと思ってもらう。そして、最後まで飽きさせないために、段階的にアイテムやポイントなどの褒賞を与えて達成感を持續させる。ゲームの要素を取り入れた学習ソフトでも、そうした視点を重視している。

特長 意欲や集中力が高まる

特に、ゲームの要素を取り入れるのに適しているのは反復学習だ。

「一般的に、反復学習をつまらないと感じる生徒は多いものです。そこでゲームニクスを応用し、ゲームをクリアするかのような楽しさを追加することで、意欲や集中力が高まり学習効果が上がると考えています」（サイトウ教授）

学習意欲を高める点では、「ソーシャルゲーム（*）」の可能性も模索されている。例えば、まず個々で反復学習に取り組み、アイテムを集めたり自分のレベルを上げたりした後、他のユーザーと共同で課題を解決するといったゲームが考えられる。こうすれば、一人で取り組むよりも、学習意欲が高まると期待されている。

課題 受け身にならないソフトの開発

一方、ゲームは生徒を「受け身」にしやすい。「反復学習の学習ソフトに取り組み生徒は

とても集中している様子が見られますが、それは深く考えなくても無意識的に集中できるような仕組みになっているからであり、本質的には受け身の学習です。これはゲームそのものの特性でもあります。学習の中でゲームの要素を取り入れる時は、こうした特性を十分考慮することが大切です」（サイトウ教授）

**デジタル教材の利点を生かした
新たな授業デザインを**

早稲田大学院教職研究科の武沢護客員准教授からは、ゲームを含めたICT活用について広い視点での提言もあった。

「私が視察したオーストラリアでは、さまざまな学習ソフトが開発されていました。近い将来、日本でも更にICT環境が整うでしょう。日本では教師が独自に作成した教材を使う文化がありますが、そうした発想だけでなく、教育機器メーカーやソフト開発会社などの他業種とも連携して質の高い学習ソフトの開発に取り組みが必要だと思います」

従来の指導に学習ソフトをどう組み込むか

学校現場でのDSの活用事例を紹介した足立区立江南中学校の平澤圭先生はこう話す。

「これまでとは少し異なる発想からの授業デザインが必要かもしれません。例えば、紙と黒板を基本としつつも反復学習にはDSを使うなど、デジタル教材の利点を生かした授

業構想が必要になると思います」

ゲームに対してあまり良い印象を持たない保護者や教師への対応

「ゲームは時間の浪費」と考える保護者は多い。しかし、遊びが目的の一般のゲームと、ゲームの要素を使って教育効果を高める学習ソフトは別物であり、そのことを理解してもらうことが先決だ。平澤先生の話では、導入時、抵抗感を示す教師もいたが、生徒が集中して取り組む姿を見らるうちに理解が進んだという。また、保護者の心理的な障壁について、サイトウ教授は「学習ソフトの有効性を具体的に伝えると共に、生活面でのアドバイスも必要かもしれません」と話す。

中立的な議論を通して、生徒の学力を高める学習ソフトの開発が求められる

主催者の藤本徹特任助教はデジタル教材の課題を次のように総括した。

「今やゲームだからダメという時代ではありません。ゲームの中で教育に取り入れられるノウハウを活用し、従来の学習活動を補完・促進する考え方が必要ではないでしょうか。中立的な議論やソフト開発を進める中で、有効性の高いソフトが生まれると思います」

次号では、ゲーム要素を取り入れた学習ソフトの可能性について異なる視点から考えます

*ネットワーク上で他のユーザーとコミュニケーションを取りながらプレイするオンラインゲームのこと

2011Vol.2特集「言語活動で授業を捉えなおす」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*「VIEW21」中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト(<http://benesse.jp/berd/>)でご覧いただけます。

◎「言語活動は教育目標達成のための手段である」という、東京女子体育大の田中洋一教授の話は、とてもよく理解できました。自分の授業で言語活動を取り入れる時、活動自体が目的になりがちでしたが、あくまで授業目標を達成するための手段であるという位置付けを再認識しました。 [北海道/S中学校/N・M]

◎東京女子体育大の田中教授の話の中で、「大きな言語活動」と「小さな言語活動」という捉え方がとても参考になりました。言語活動に大小というバリエーションを持たせることで、さまざまな教育活動に取り入れやすくなると思います。 [長崎県/A中学校/Y・F]

◎吉野ヶ里町立三田川中学校の実践では、言語活動の4領域の分類と具体的活動が参考になりました。各教科に生かすことができ、授業で行う生徒の活動が豊かになり、思考力・判断力等の育成につながると感じました。また、授業以外での「今日のことば」やエッセイは、書く力を育てるために効果的であり、教科の目標を達成するための言語活動であることがよく表れていると思いました。 [大分県/D中学校/K・K]

◎府中市立府中第三中学校の取り組みでは、谷合しのぶ校長がどう働きかけているのかが、具体的かつ明確に書かれていて、校長としてどうすべきかがよく分かりました。教員のベクトルをどう合わせていくかという点で、今後参考にしたいと思います。「3校の事例か

ら学ぶ言語活動実践のポイント」もよくまとめられて良かったです。 [高知県/H中学校/T・F]

◎四万十町立窪川中学校のグループ学習では、生徒同士の教え合いによって、個々の生徒の自己有用感が生まれ、授業参加への意欲が高まったのだと読み取りました。個々の生徒の学習理解が深まり、生徒一人ひとりが満足感を得られたからでしょう。このように、授業中に行う生徒指導が、学校をより良くしていく原動力になるのだと感じました。

[群馬県/H中学校/T・A]

◎言語活動の充実、キャリア教育を推進する上でも非常に重要なポイントになると思います。その観点で今回の特集を読んだとき、「3校の事例から学ぶ言語活動実践のポイント」と「資料」のデータはとても参考になりました。データから課題を読み取り、自校の実態と重ね合わせ、次なる策を考える事がこれからの教育を考える上でも重要と捉えています。

[新潟県/K中学校/S・K]

◎特集では、言語活動を充実させるための授業展開の方法などが具体的に示されていて、本校でも実践できると感じました。言語活動を通じて授業目標を達成させていくと共に、人間関係の構築や、それに伴う自尊感情、自己有用感の育成にもつながることに気付きました。 [兵庫県/S中学校/I・H]

お知らせ

文部科学省が被災地の学校と提供者を結ぶマッチングサイトを開設しています

「東日本大震災 子どもの学び支援ポータルサイト」<http://manabishien.mext.go.jp/>

編集後記

「学び合いにマニュアルはない。しかし、学び合いを研究し続けるマニュアルは学校に残したい」。退任を翌年に控えた校長先生がおっしゃっていた言葉です。学び合いのアプローチや取り組みは変わっても、目の前の生徒一人ひとりの課題を丁寧に見取り、最善の指導方法を模索し続ける教師文化は残したい。将来の中学生、また中学校教育を見据えていらっしゃるからの言葉だと感じました。これからも、こうした先生方の想いや熱を伝えていくよう努めてまいります。引き続き、ご指導をよろしくお願ひ致します。(佐藤)

VIEW21 中学版 2011 Vol.3

2011年11月2日発行/通巻第311号

発行人 新井健一
 編集人 原 茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
 Benesse教育研究開発センター
 (株)ビーヴィオコーポレーション
 (有)ペンダコ
 印刷製本 二宮良太
 編集協力 二宮良太
 執筆協力 二宮良太
 撮影協力 荒川潤、川上一生、筒井岳彦

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部

電話 03-5320-1287

〒163-0411東京都新宿区西新宿2-1-1
 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2011